

第5回 aaca サロンの開催報告 『光と共によみがえる再生硝子のアート』

板橋一広（アート作家）、
斎藤誠・黒田科子（遠藤照明）

鹿島建設株式会社建築設計本部
会員増強委員会委員
日本建築美術工芸協会法人会員
浜田 優



第5回 aaca サロンは、新規法人会員株式会社遠藤照明の企画で、アート作家の板橋一広氏をお招きし、遠藤照明のシニアディレクター斎藤誠氏、モデレーターに同じく遠藤照明黒田科子氏と共に、「光と共によみがえる再生硝子のアート」素材が物語る・時間・空間・光の効果とは？ というテーマで行われました。

趣味は「硝子と音楽」という板橋一広氏は、20世紀末頃から「ガラス作家」と呼ばれるようになるまでは環境デザイン・プランニングの仕事に従事。当時、コンペで当選した東京メトロ新御茶ノ水駅の壁面約250mのアートウォールを計画、色彩のデザインを志向し「暦の駅」と名付けた巨大壁画36枚は、地下鉄駅構内の大変過酷な環境を考慮し、ガラスモザイクを使った作品として制作。

そんな最中、メキシコにあるナイカ鉱山の発見を知り、その後の転機となる。2000年に地下300mから発見されたナイカ鉱山の洞内は、透明石膏（セレナイト）の巨大結晶で埋め尽くされている（fig1）。板橋氏は、この鉱山に大変興味を惹かれ、ナイカ鉱山の「ごっこ遊び」的に、立体・石英の様なボリュームのある素材の制作を始める。

「ガラスを溶かしてみたい」と思い始め、遊び心でガラスにアイロンをかけたり、七輪で焼いてみたりを始めたのが現在のきっかけ。割ったガラスの破片が、その痕跡を残すように様々な模様が出来ようになり、結晶の成長を温度帯の調整等で操作が出来ようになった。2009年には、イタリアミラノサローネに作品を出品。



fig1 ナイカ鉱山

さらに、大判の板硝子（4×8サイズ）が作りたいと思い、自分の窯を持ちリサイクル硝子で作品を作り



fig 2 りんね・雪花硝子



fig 3 雪花硝子のカーテンウォール



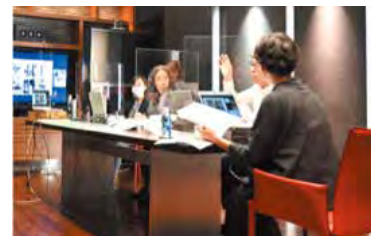
fig 4 光学ガラスのカウンター



fig 5 雪花硝子の茶室



fig 6 宮益坂ビルディング



会場風景

始める。2006年、リサイクルガラスで作成された作品、りんね・雪花硝子がコンペでグランプリを獲得（fig2）、仕事の依頼が来るようになり硝子を作っていこうと決意されたとのこと。

その後、板橋氏と建築との関わりについて紹介頂きました。

明治神宮外苑アイススケートリンク増改築では、雪花硝子で外装カーテンウォールに挑戦（fig3）。恵比寿ヒルサイドガーデンでは、「クリスタライジング」というテーマで棒硝子を並べた壁面や、光学ガラスを積層した受付カウンターを制作（fig4）。スパイラルホールでは、建築家浦一也氏とのコラボレーションで「お茶室」を作成、雪花硝子で初めて空間を作る（fig5）。京都の二条城で開催されたアート京都という国際的イベントでは、「雪花庵」という茶室を展示。

宮益坂ビルディングは、68年前に日本で初めての分譲マンションを解体再生するというプロジェクトで、斎藤誠氏とコラボレーション（fig6）。

斎藤誠氏は、「ザ・ウィンザーホテル洞爺」を始め数多くの建築施設の照明計画・各種照明器具を開発、今回の雪花硝子のシャネルリアが設置されたエントランスホールの照明を計画するにあたってのお話を伺いました。光の当て方の検証から始まり、色温度の違う2つの光源2700Kと6500Kの選択、自然光の入る吹抜空間で、時間による表情の変化と調光調色により、朝から夜まで4つの顔を表現したとのこと。設置にあたっては、モックアップによる強度試験での安全性検証やシミュレーションによる光の効果の確認を行い、最終的には設置後の無線調光で、関係者全員が確認するという作業を行ったことを紹介。

最後に、遠藤照明の次世代調光調色シリーズ「Synca」により、雪花硝子を使った演出検証を行い、一つの照明器具で色温度だけではなく、カラー演出が可能になった今後の照明計画の可能性について語って頂きました。

第3回以降、covid19対策としてweb開催とさせて頂いていきます。今回は、遠藤照明の会議室をお借りし、遠藤照明スタッフの皆様のご協力のもと大変興味深いサロンが開催できましたことに感謝致します。